

たものである。

宗祖の御銅像を拜して

小林 貞 宣

袈娑凜留色 瀝盡滿腔丹

天地納三諫 風雷排萬難

宣闡無上道 成就甚深歡

妙法蓮華相雲開十丈寒

日蓮上人銅像贊 石塚居士 永坂周拜艸

此處は九州博多東公園、廣い松原は、縁滴るばかり枝の沙風に吹かれて、或は眞直に、或は曲れる等あり、中に嚴然として立てるは宗祖の御銅像である。正面に『立正安國』と太く大きく掘りつけてある。

笑へば子女も懐かしみ、怒れば龍虎も恐る御説光、御袈娑は凜として空に翻へり、雲を開いて丈高く、御生涯御奮闘の有様は、今猶雨と闘ひ風と争ひ、自分をして地に伏し歡喜と尊敬との涙を

以て拜せしめた。宛然生身の宗祖に遇ひ奉る心地して、唱題は腹の底より湧き出でた。あの深草の元政上人が延山に詣で『俱に末法に生れて師に逢はず。』と詠じ給へる詩も、自分には俱に末法に生れて師に逢ふのうれしさ、之に比ぶるものはあかつた。春の曉に、朝霧繞ぐる松原を裸足にて參拜する人老若男女、何れも一同に銅像前のうがひ水にて手を淨め口を濯ぎ長い線香を林の如く立て、煙は霧と一つにあり、松原の中は眞白にゐる位である。かくして御銅像前の石段に座して、一同の腹より絞り出して唱ふる御題目は、松原に響いて寂光土を眼前に現じた。殊に若き婦女子の細い、しかも透る聲で、一心に唱ふる題目は、他に稀に見るところで、全く感服の外はなかつた。御銅像の石段を上つて御姿の周圍を繞つて見るに、御臺座には御一代記の圖と蒙古襲來の悲惨な圖とが刻してあつた。御一代記の龍之口法難、及び小町の辻説法の宗祖の御顔は、信徒が手を以て摩擦すると見えて光つて居た。この一事を見ても如何に九

州人の熱烈ある信仰を持って居るかゝ知れる。この御像より一町ばかり隔てたところに龜山上皇の御銅像がある。宗祖の御像と比すれば宗祖の方が遙かに大きい。

何故に九州人は熱烈な信仰を持って居るか云ふに、自分の考へでは、正嘉正元の頃蒙古大軍の襲來に遇ひ、無慘にも我同胞は彼等の毒手に罹りて多く死し、且つ國家の危機は累卵の状態であつた時、龜山帝は痛く國家を憂へ、玉体を以て國難に殉ずと宣ふた、時に宗祖は出でられて御旗曼陀羅を圖し給ひ、之れを以て蒙古の大軍を退けた。この御旗の御加護によりて國体を安泰にせられた故、其當時の人民が信仰を以て唯一のものとし、其の流れが今日に至りかように熱烈を極めて居るのであらうと思つた。

此御銅像こそ、故佐野前勳上人の力と、其時の信心堅固なる信徒との力で出来上つたものであるといふ。實際師は宗門に偉大な貢獻をした人で、師の様な人が此世を早く去つたのは全く遺憾であ

る。

此の歴史ある地に御銅像を立つたのは、師の凡人に卓越して居る事が知れる。如何なる無宗教者無信仰者でも、一度此御前に至つたなら、必ず頭を垂れ合掌せずには居られないと思ふ。

自分は初めて此處に詣で、尊敬と感歎の外はあかつた。

聖祖の御傳記を拜讀して

中 村 義 明

夫れ船は磁石に依りて航し、瀛車は鐵路に頼りて通ず、人生豈教法なくして濟るべけんや。

人智未だ開けざりし古代僻地に於てすら、已に彼此の禮あるを見る。人にして世に處する一日も是れ無かるべからず。而して此教法たる國土に因りて異り、詩代に應じて差別あるを免れざるなり。之れを吾國の史實に徴するも、太古中古戰國と次第に世連に伴ひ變遷ありしを知る。